

保育の中で生きるアセスメントとは

支援の必要な子どもたちの保育をどう見直すか

企 画：	企画代表	秦野悦子（白百合女子大学）
司 会：	秦野悦子	（白百合女子大学）
話題提供者：	野本茂夫	（國學院大學）
話題提供者：	塩谷 香	（東京成徳大学）
話題提供者：	宮崎 豊	（玉川大学）
指定討論者	柴崎正行	（大妻大学）

【企画主旨】

「保育の中で生きるアセスメントとは」というテーマで、保育の中で生きるアセスメントは何かを理論的、実践的に検討する機会としたい。そして、様々なニーズをもつ子どもたちが、子どもが育つ社会の中で発達していくためのアセスメントがどのような支援へとつながっていくのかを考えたい。さらに、保育の中で支援の必要な子どもたちの保育をどう見直していくのかについての議論を深めてゆきたい。このシンポジウム全体に共通する認識として、技法としてのアセスメントを問うわけではなく、どのように子ども理解を深めてゆくか、理解に基づく支援とはなにかという視点からアセスメントをとらえてゆくことである。保育支援の現場では、アセスメント結果が、子どもの抱える問題の発見や子どもの環境調整につながる情報提供になり、明日からの保育にうまく生かすことができる具体的提案にむすびつけられるのか、アセスメント結果から導き出される対応が、保育現場の願いや、保護者の思いに即したものとといえるかどうかなどの吟味はどのようになされているのだろうか。

各話題提供にあたっては、①保育支援実践にかかわるそれぞれの立場を明確にし、② アセスメントにおける視点やアセスメントの実際をそれぞれのテーマで論じ、③保育の中で生きるアセスメントであるかどうかの評価をどのようにおこなうのかについての見解を述べていただく。

指定討論にあたっては、3名の話題提供を受けてあらためて包括的視点から、保育の中に生きるアセスメントとして吟味し、支援の必要な子どもたちの保育をどう見直すかの視座を提供していただく。シンポジウム参加者すべてと、保育の中で生きるアセスメントに対する相互理解を深めていきたい。

【話題提供】

保育におけるアセスメントの「うれしさ」

野本茂夫（國學院大學）

話題提供者は、言語発達相談や幼児教育相談、巡回保育相談、或は、保育者養成校の教員として幼稚園や保育所での園内研や保育者研究会で保育とかかわってきた。その中で、必然的に特別な支援を必要とする子どものアセスメントを何らかの形で行い発達支援や保育支援をしてきた。この過程で、保育の視点で特別な支援の必要な子どもの保育は、どうあったらよいかを考えていた。今、思い返すと、発達支援や療育支援として行っていたアセスメントは、果たして保育支援のアセスメントになっていたのかと反省することも多い。そもそも、保育現場が必要としている支援は、特別な支援を必要とする子どもの支援であることよりも、そうした子どもがいる保育の支援を求めている場合が多い。

保育現場は、生活や遊びを通して子どもが総合的な体験や経験が得られる場である。また、幼児期の子どもの成長発達には、固定された領域に分けて捉えるのではなく、それぞれの領域が互いに関連し影響し合って展開しているもので、一人ひとりの子どもを取り巻く環境とのかかわりが成長発達に深くかかわり、とりわけ養育者や保育者、そして共に育つ仲間とのかかわりが大きく影響する。

このような幼児期にふさわしい経験の在り方がどの子にも必要であると確信してから、話題提供者は、特別な支援を必要とする子どもの支援と共に「どの子にもうれしい保育」が実現されることを目指した保育支援が不可欠であると考えようになった。特別な支援を必要とする子どもの保育での支援は、その子への直接支援とともにその子のいる保育そのものを見直す支援と一緒に考えていく必要がある。その為には、保育の質を高めていくことや保育者の資質向上が大切であり、保育に関係する地域の専門家と保育者が主体性をもって協働し、相互支援的に育ち合い向上し合うことが、どの子もよりよく育つ保育支援につながると考えている。保育における発達アセスメントも「どの子にもうれ

しい保育」になるよう、保育者と関連する専門家が協働して取り組み、子どものうれしさや保護者のうれしさへと導かれるアセスメントでなければならない。そして、保育者の元気が出るアセスメントになるように保育で協働する実践をしていきたい。

どの保育者にも意味のある保育アセスメント

塩谷 香（東京成徳大学）

保育園長経験者として、保育者の研修や研究会等に参加しながら、子どもや保護者そして保育者の現状を窺い知る機会が多い。私の役割は、保育者が必ず持っているその専門性や力を発揮できるように、問題を共に整理しながら、まずそこに気づくことを手助けすることであると考えている。

保育現場では、特別に支援が必要な子どもが増え、保育者が対応に苦慮するというケースを多く聞く。子どもだけではない。保護者においても同様である。つまり子どもの育ちにおける環境が、良し悪しという単純なものではなく実に多様になっているという現実保育者がうまく対応できないのである。一方、特別に支援が必要であると誰の目にも明らかである場合は、対応を考えざるを得ないが、むしろ集団の育ちの中で保育者に見えないまま、必要な支援がなされないで育つ子どもがいるのも現実ではないだろうか。

子どもが様な環境で様に育つことが前提の特別支援ではあるが、すでにそれではすべての子どもの育ちを丁寧に拾っていくことはできない。育つ環境も家庭の状況も保護者の考え方もすべてにおいて様ではなく、実に多様であるからである。こうした実情の中で、一人一人の子どもの育ちを丁寧に見ていくことこそ、保育者にとってもその専門性を向上させる意味のあることなのではないか。子ども一人一人にとって、園生活が楽しく充実したものになっているのか、今この子どもの育ちにとって必要な支援とは、どのようなことなのか、保育者の専門性においてとらえられたことを実行していくことが今最も重要である。それは実は、この上なく基本的な営みであるとする。

改めて保育の中でのアセスメントの資料となる、子どもの育ちを理解し確認していくための記録の重要性について考え、それが実際の支援に結びついていくシステムを確認したい。恐ろしく忙しい保育現場で、どのようにすればこの基本的な営みが、うまくなされるのか、一人一人の子どもの育ちを丁寧に拾い上げ、必要な支援とすることができるのか、フロアの方々と活発に論議できることを期待したい。

「巡回保育相談」におけるアセスメント

宮崎 豊（玉川大学）

障がいのある子どもの保育、保育学を研究する者として2つの行政区の「巡回保育相談」に携わって6年になる。以下、「保育者と協働した対象児の育ちの指標づくりと多角的・多層的なアセスメント」「園生活の文脈の中で子どもの育ちをとらえる」「物的環境・人的環境との関係性の中で子どもの育ちをとらえる」という3つの視点を以って子どもの育ちと保育者の保育を支えることに取り組んでいる。これらの事業は、現行の制度化以前から実施されており、複数の相談員が共通見解のもとかかわっているが本提案では私の解釈と表現で語ることとする。X市の「巡回保育相談」の流れを図1.に示す。

保育に生きるアセスメントとするために、対象児の育ちの状況を検査等でとらえた姿(*4)に加え、対象児にかかわる複数の者が保育の場の変わりゆく場々面でその姿をとらえ、その活動の目的・援助方法を解釈し、クラスの一員としての関係性の中で課題を括り出すことを大切にしている(*1-3)。環境への適応性、モノや人と関係、遊びの内容、状況性に応じた処し方、など個々の課題に即した『その子どもの指標』を担任と相談員が協働で括り出し、相談の中で複数の眼で多角的に評価している。また、カンファレンスでその指標と評価に基づいた指導の方向性や保育方法や内容をも検討し、園全体での共通理解も図ることとしている(*5)。加えて、事前事後カンファレンスを園内で開き、個々の指標とアセスメントの妥当性を多層的(◆1-3)に検証している。

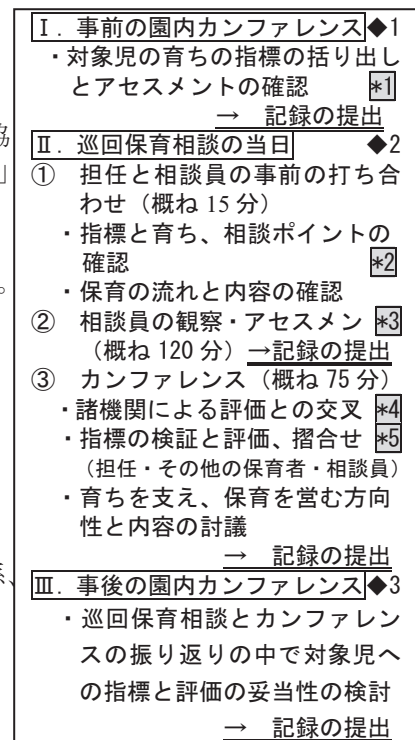


図1. X市の巡回保育相談の流れ